

Title	書評：文学社会学は、ドン・キホーテ的な研究領域か?ジゼル・サピロ著『文学社会学とはなにか』鈴木智之・松下優一訳、世界思想社、2017年
Sub Title	
Author	本浜, 秀彦(Motohama, Hidehiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.121- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：文学社会学は、ドン・キホーテ的な研究領域か？

ジゼル・サピロ著『文学社会学とはなにか』

鈴木智之・松下優一訳、世界思想社、2017年

本浜 秀彦

ピエール・ブルデューの後継者のひとりであるジゼル・サピロ（現フランス社会科学高等研究院研究主任）が、文学社会学の全体像を示そうと試みた著作の全訳である。

仏書を訳出した鈴木智之、松下優一の両氏は、松島淨、加藤宏、武山梅乗氏らとともに、「沖縄文学」を主な対象に、文学社会学の研究アプローチで研究を積み重ねてこられた学究だ。「沖縄文学」は、沖縄出身者による、近現代の日本（語）文学で、戦争、米軍基地など沖縄が抱える問題や、沖縄の歴史、文化、社会にこだわって書かれた小説や詩などの文学作品を指すが、本書をひもといた、文学研究者である私のもっぱらの関心は、お二人のご研究が、社会学のどのような理論と結びついているのかを探ることにあった。つまり、文学研究の側から、社会学の研究領域にいかにして“越境する”ことができるのか、現在におけるその学問的状况を見極めるための読書であったことを予めお断りしておく。

原著は新書サイズ、内容を簡潔にまとめる体裁であり、その骨子は次のとおりである。

序論

第1章 文学社会学——理論とアプローチ

第1節 社会的事実としての文学的事実

第2節 機能主義、相互作用論、関係論的アプローチ

第2章 作品生産の社会的条件

第1節 社会のなかで文学が置かれている状況

第2節 文芸の世界とその諸制度

第3章 作品の社会学

第1節 表象から手法へ

第2節 社会学的対象としての美的固有性

第4章 受容の社会学

第1節 媒介の諸審級

第2節 読書の社会学

結論

本浜秀彦「書評：文学社会学は、ドン・キホーテ的な研究領域か？ ジゼル・サピロ著『文学社会学とはなにか』

『三田社会学』第23号（2018年7月）121-124頁

＊「節」に続く「項」やコラムの転記は省略

序論の冒頭はこう始まる。

文学社会学は、文学的事実を社会的事実として研究対象にする。そこには二重の問いがともなう。ひとつは、社会現象としての文学の問いであり、これには作品を生産し、消費し、評価する多くの制度や個人が関わっている。もうひとつは、文学テキストのなかに時代の表象や社会的争点がいかに刻印されているのかについての問いである (p.7)。

これは文学社会学の、学問的性格を実に分かりやすく述べた文章である。本書の叙述に一貫しているのは、その説明から派生する、文学社会学のもつ「二重の問い」から派生する数々の問い——それは、テキストをどのように定めるのかをめぐっても容易ではない——に対し、常に理論と方法に対して自覚的にこたえている、著者サピロの思考の痕跡だ。同時に、翻訳、グローバル化などといった、現代の複雑化する諸問題に立ち向かうべく、その理論化の更新をはかろうとしている彼女のスタンスも窺える。

まず著者は、文学史的な法則に注目した文学社会学の先駆的な研究から、1960年代から登場したさまざまな理論（マルクス主義的な反映論、ブルデューの場の理論など）を手際よく整理する。その上で、文学についての考えを次のように述べる。

集合意識やイデオロギーや感情構造の表れとして理解されるならば、文学は諸階級あるいは階級内の諸部分のあいだの社会関係によって媒介され、その諸々の矛盾を反映するものである。コミュニケーション行為として理解されるならば、文学はそれを媒介する諸審級のシステムのなかに位置づけ直されねばならない。制度、システム、場、世界あるいは関係のネットワークとしてとらえられるならば、文学はそれを生み出す社会的世界によって媒介されるものだということになる (p.58)。

文学を、そのように「媒介」という観点から考えるならば、「文学的事実への社会学的アプローチ」(p.10)である文学社会学は、「作品とその生産の社会的諸条件を媒介するものについての研究」(p.10)と解することができるのだろう。そして、彼女によると、その媒介は次のような「水準」に分けられるのだという。

- ・作品の生産の条件：「文芸の世界の機能様式をはじめとする作品生産の物質的な諸条件」
- ・作品の社会学：「作品が伝えている表象から、その著者による生産の様態」
- ・受容の社会学：「作品の受容と領有の条件、および作品の使用のされ方」(p.10)

以上の三つの「水準」は、第2章から第4章でそれぞれ詳細に論じられるが、そのような大枠を組み立てた上で、サピロは文学社会学の全体像を示すのである。

もっとも、こうした俯瞰的な整理がずっと頭に入るのは、もともと文学社会学に明るい人であるに違いない（喩えると、日本史や世界史の「要点整理」のような受験参考書が、通史をきちんと勉強した上でないと十分に役に立たないように）。それを補うべく、松下氏は「訳者解説」で本著の社会学的な解説を、ブルデューの「場の理論」をキーワードに行っている。それによると、ブルデューの文学社会学における遺産は、作家のバックグラウンドや時代性だけに結びつけるのではなく、作品の物語構造、修辞や文体など、「文学に固有の論理（文学性）」(p.200)を加えた社会学的な説明を打ち出したことにある。それは、マルクス主義的アプローチやサルトルによる伝記的アプローチに彼が挑んだ中から構想されたものであり、ブルデュー以後、彼の理論を応用した研究が次々と登場する——そうした研究の文脈に本著作は位置づけられ、また、鈴木氏がその著作を訳出した、ベルギーのジャック・デュボアの研究などは、その流れに共鳴していると言えるのだろう。

本書をひととおり読み終えての正直な感想は、文学社会学についてのこのような見取り図を、20年前に示してもらえれば（もちろんそれは無理な話だが）、暗中模索した私の研究は、ずいぶん助かったはずだという思いだ。1990年代後半、アメリカの大学院で、沖縄文学を比較文学的に論じる *dissertation* に取り組んだ際、芥川賞の機能を分析するべく先行研究にあたったが、選考委員による選評を読み解く文学評論の類のものしかない状況だった。そうした中、ヒントとなったのが、ブルデューの提唱した「文学の場」の概念だった。その後、彼の影響を受けたアメリカの英文学研究者ジェームス・イングリッシュの、文学賞に関する研究などを知ることになるが、ブルデューが『芸術の規則』でフローベルの「感情教育」を執拗なほど丁寧に読み解いている意味すら、当時の私は十分理解していたとは思えないのだ。

もうひとつの感想は、文学研究も、社会学も、実は同じところを見ているし、同じことに気づいているし、考え方も大きくは変わらない、ということだ。けれども、それぞれ研究領域があり、もっと生々しく言えば、大学の学部学科などの「制度」も存在しているから、それぞれの手法に頑な、また「外部」に対しては排他的で、境界を少しでもまたごうとすると、「これは文学研究（社会学）じゃない」という容赦ない批判の声が出たりする。

確かに、テキスト分析を重視する文学研究においては、従来、テキストに外在する社会的な要因を意識的に（禁欲的に？）取り除いてきた。もっとも、近現代日本文学研究においては、貧困や労働、ジェンダーなど、社会的なテーマを扱う研究は少なくなく、出版メディアに関する研究の蓄積もある。ただ、文学作品を必ずしも社会学の理論と積極的にコラボレーションしようという展開は今のところ見られない、というのが現状ではなのではないだろうか。

しかし、文学と社会学という学問領域を交差させなければ正しく捉えられない対象もある。その典型が、記者のお二人も研究対象とされている沖縄文学だ。

例えば、文学賞、とりわけ芥川賞という「文化装置」との関係。沖縄出身者の芥川賞受賞作は四作だが（大城立裕『カクテル・パーティー』（1967 年）、東峰夫『オキナワの少年』（1972 年）、又吉栄喜『豚の報い』（1996 年）、目取真俊『水滴』（1997 年））、いずれも受賞時の当時の社会的な状況は、テキストを読む行為、あるいは出版界の動向に全く影響を及ぼさなかったとは考えられないのである。すなわち、大城、東作品の受賞時は、戦後、米軍統治が続いた沖縄の施政権の日本への返還が、大きな政治的な課題となっていた時期、又吉、目取真の受賞時は、1995 年の米兵による少女暴行事件をきっかけにした反基地運動、日米安保の揺れが顕在化し、沖縄への注目が高まっていた時期だからだ。

このような文学的事実を把握するためには、おそらく文学の自立性だけに固執した方法だけでは限界がある。「場の理論」など、文学社会学で蓄積されたことばや概念を援用しなければ、ある種のパワーゲームである文学賞の性質や、文学賞受賞という“スキャンダラス”な出来事を、文学的事実として正確に浮かびあがらせることはできない。

ここで詳しくは紹介できないが、文学賞と沖縄文学の関係を、文学社会学がいかに有効であるのかは、訳者のお二人のこれまでのご論考やご著作を見れば、それはすぐに分かることだ（例えば松下氏の「作家・大城立裕の立場決定——『文学場』の社会学の視点から」『三田社会学』第 16 号、2011 年）。

本書が示したように、文学社会学は、決してドン・キホーテ的な研究領域ではない。もし、日本において、文学社会学がドン・キホーテ的な研究領域のように見られるのであれば、それは社会学にとっても、文学研究にとっても不幸なことである。

グローバル化の中における文学と翻訳の問題ひとつ考えても、さまざまな要因が媒介し、文化的、経済的価値が生み出されている現代において、文学をとらえていくために、文学研究と社会学とのコミュニケーションの必要性はより高まってくるに違いない。その意味において、本書はまさに時宜を得た一冊である。訳出の労を多としたい。

（もとはま ひでひこ 文教大学国際学部）